

令和元年度研究発表会のご案内



研究主題

粘り強くとともに学ぶ子どもの育成（2年次）

期 日 令和2年2月7日（金）13:25～17:00（受付12:40～）
8日（土）9:00～16:00（受付8:15～）

会 場 熊本大学教育学部附属小学校
内 容 各教科等の授業公開・分科会・講演

講 師

京都大学 准教授 石井 英真 先生

京都大学大学院教育学研究科准教授 博士（教育学）
神戸松蔭女子学院大学人間科学部准教授などを経て現職。

著書『中教審「答申」を読み解く』（日本標準）

『今求められる学力と学びとは ―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影―』（日本標準）

『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業 ―質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業―』（日本標準）

『授業改善8つのアクション』（東洋館出版社）など



ホームページからも
申し込みできます！

附属小学校ホームページのご紹介

新しいコンテンツ
続々登場!!

● 授業研究最前線

臨場感あふれる各教科の取
り組みを随時更新します。

● 実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業
実践が掲載されます。



©2010熊本県くまモン

ホームページ <https://elem.educ.kumamoto-u.ac.jp> 熊大附属小 検索

熊本大学教育学部附属小学校 研究だより vol.53

発行日 令和元年9月20日

編集・発行 熊本大学教育学部附属小学校 〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5-12 TEL 096(356)2492 FAX 096(356)2499

令和元年度 熊本大学教育学部附属小学校

附属小 研究だより

2019.9
VOL.
53

研究主題：粘り強くとともに学ぶ子どもの育成（2年次）



平成30～令和元年度 文部科学省委託

「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進」研究校

8月22日に開催した「夏の実践研修会～授業リフレッシュセミナー～」では、県内外から200人を超える多くの先生方にご参加いただき、盛況のうちに研修会を終えることができました。外国語活動をはじめ4つの公開授業、その後の授業研究会、12の教科等の授業づくりセミナーを行いました。いかがだったでしょうか。

「多くの先生方と意見交換して、自分にはない視点を多く得ることができました。」「明日からの授業に活かせる点があり、すぐに役立つ内容もありました。」「粘り強く学び続ける授業づくりの一端を理解できました。」との嬉しい感想をいただきました。一方で、「粘り強さについて、もう少し話を聞きたかった。」「粘り強さは、子どもと教師が思いを共有したほうが、より研究が深まると思った。」「子どもたちが食いつくような課題設定の難しさを感じました。」という課題もいただきました。99.4%の参加者が、本研修会が「2学期以降の授業に活かせる」との回答もいただきました。ありがとうございました。

今年度は、2年間の文部科学省の「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進」の研究委託の最終年度となります。昨年度の研究実践で見えてきた教科等の本質に迫る授業展開、教科等の「見方・考え方」、評価等の研究をさらに進め、「粘り強くとともに学ぶ子ども」の姿を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に真摯に努めていきます。

この研究実践の成果を、令和2年2月7、8日（今年度は2日間開催）の研究発表会にて公開いたします。主体的・対話的で深い学びを子どもの姿を通して提案し、皆様とともによりよい授業づくりについて協議できたらと考えておりますので、ぜひご参加いただき、忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

熊本大学教育学部附属小学校 副校長 猿渡 徳幸

教科等研究紹介

本校が目指す「粘り強くともに学ぶ」ことの価値とは

研究部長 中尾 聡志



1. AIやロボットにはできなくて、人間にしかできない「人間としての強み」

夏休みを終え、学校に真っ黒な顔をして登校してくる子どもたち。子どもたちは口々に夏休みの思い出を語ってくれます。初めて行った旅行先での話、山の中に入って虫取りした話など、2学期最初の日には、毎年このような子どもたちの声で教室がいっぱいになります。私の大好きな光景です。その中でも特に好きなものとして、自由研究について説明する姿があります。模造紙1枚で終わるところをもう1枚つなげて完成させ、夏休みを通して取り組んだ「わたし」の研究を、目をキラキラさせながら語ってくれる子どもがいます。自分の研究に主体的・対話的に深い学びをしてきたのだと嬉しく感じます。きっとみなさんの教室でも同じような姿が生まれていたのではないのでしょうか。

さて、前回の熊大附小だよりでは、新しい時代を生き抜く子どもの姿について考え、その姿を生み出すために「主体的・対話的で深い学び」へと授業改善していくことが必要だ、さらには教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせていくことが大切だということを書かせていただきました。今回は本校研究主題『粘り強くともに学ぶ子どもの育成』の中の「粘り強さ」の価値について語らせていただこうと思います。

この「粘り強さ」は、昨年度研究主題として設定したのですが、今とてもホットなワードになっています。最も新しい資料としては、6月に出された国立教育政策研究所の「学習評価の在り方ハンドブック」の中の「主体的に学習に取り組む態度の評価イメージ」に繰り返し出てきます。ハンドブックでは、主体的に学習に取り組む態度は以下に示す2つの側面から評価することが求められています。抜粋して取り上げますと、次のようになります。

- ①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることにに向けた粘り強い取組を行うおとする側面
- ②粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

学習評価のワーキンググループの報告の中にも同じような記述がありましたが、指導と評価の一体化の視点から考えると、「評価すべき対象」はそのまま「身につけさせたい力」になります。なぜ、今この「粘り強さ」にフォーカスが当たっているのでしょうか。

文部科学省から出された「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」の中で、これからの日本にはSociety5.0の社会がやってくると言われています。「これまで人間でなければ担えないと考えられてきた分野に新しい技術が発明され、我々の社会や生き方そのものを大きく変えると言われています。近い将来「AIやロボットによって多くの仕事が代替され、人間の負担が軽減されていく」ことが予想されています。

このような内容を読んでいると、どんな便利な社会がやってくるのだろうかという大きな期待をする気持ちと、その反面、人間の仕事は人工知能(AI)に奪い取られ、今学校で教えていることは時代が変化したら通用しなくなるのではないかと不安が生まれてきます。しかし、そんなことはないのです。膨大なデータを基に、必要な情報を瞬時的に調べあげ、人間にはまねできない速さで情報を分析し、解答を導き出す人工知能(AI)にはできず人間にしかできないこと、いや「人間としての強み」と言える力があるのです。その最たるものとして、私たちは「粘り強さ」があると考えています。

人工知能(AI)が答えを出せるものは、人間が打ち込んだデータを基に分析される答えのみです。これまでのデータがなく、曖昧な環境の下では、AIは答えが出せないのです。これから子どもたちが生き抜く社会は、予測困難な社会であり、答えなき時代。たとえ、人工知能(AI)が答えを出せないと答えた問題であっても、『粘り強く』今ある情報の「意味」を見つめ直し、しっかり思考しながら「対話」し合い、曖昧でデータがない状況においても、他者と協働して、よりよい「納得解」や「最適解」をあきらめずに見出してしていかなければならないのです。この点こそ、これからの社会を生き抜く子どもたちに身に付けるべき『粘り強さ』の価値があると考えます。

2. 「粘り強さ」を身に付けるのは、どの教科のどの領域・分野なのか？

ここまで「粘り強さ」の価値について説明させていただきました。ではこの「粘り強さ」を身に付けるのはいつ、どこなのでしょう。3年生体育の「跳び箱運動」でしょうか。それとも2年生算数の「かけ算」なのでしょうか。いや、5年生国語の作文単元なのでしょう。残念ながら「粘り強さ」が指導事項に明記された教科等はありません。つまり、ここまで述べてきた「粘り強さ」は、単純に教科の指導目標を達成しているだけでは、身につけられない力なのです。だからこそ、本校では教科と教科を結ぶ学びの中で育んでいかなければならないと考え、全ての教科等において育成しています。『粘り強さ』とは、言い換えるならば、教科と教科の学びを結ぶ「のりしろの力」と言えるかもしれません。

また、『粘り強さ』はいつ身に付くのかと問われたならば、それは『粘り強くともに学ぶ』中でしか身につけていきませんとお答えます。全ての教科等で粘り強く学んだからこそ、子どもたちは粘り強さを身に付けていくのです。本号では、国語と社会の実践をご紹介します。子どもたちが「粘り強く」学ぶことができるように、単元構成や課題設定、豊かな対話が生まれる手立て、振り返りの3点から工夫した実践となっております。他の教科の実践については、次号でご紹介する2月7日、8日の研究発表会にて公開させていただきます。たくさんの方の先生方とともに「粘り強く」議論し合い、これから求められる授業の姿について明らかにしていきたいと考えております。本校研究発表会へのたくさんのご参加をお待ちしております。

6年 国語

二編のエピローグ「ひろしの本音」 「お父さんの本音」を作ろう

(「カレーライス」 光村図書6年)

～深い学びを生み出す国語科学習～



1 単元の見通しをもつことのできる学習課題の設定と単元構成

本単元のねらいは、登場人物の相互関係や心情の変化を、描写を基に捉える力をつけることです。「カレーライス」は一人称視点で描かれており、中心人物ひろしの心情が捉えやすく感じられます。しかし「なんていうか、もっとー」「言葉がもやもやとしたけむりみたいになって」など、ひろしが自分の気持ちをうまく表現できずにいる心内語も少なくありません。そうした直接描かれていない心情を捉えるには「人物の様子や気持ちを表す描写を関連付けて読む」という考え方が欠かせません。また、相互関係を捉えるには、対人物「お父さん」の視点から物語を見直すことも必要です。

そこで、子どもたちが単元の全体像を把握し、見通しをもって学習に取り組むことができるように、「身に付ける力(A)」「考え方(B)」「言語活動(C)」を位置付けた次の学習課題を設定しました。

- A:登場人物の相互関係や心情の変化について、
- B:人物の様子や気持ちを表す描写と関連付けて読み、
- C:二編のエピローグ「ひろしの本音」「お父さんの本音」を作ろう。

本単元では人物の相互関係や心情の変化を捉える力をつけるために「二編のエピローグを作る」という言語活動を設定しました。物語は「お父さんウィーク三日目」で結末を迎えますが、「残り半分になった今月の『お父さんウィーク』は…」とあるように、お父さんウィークはこの後も続きます。その



言語活動「ひろしの本音」の背景紙

4年 社会

健康な生活の維持と向上

わたしたちの熊本「ライフライン」

～始めよう!MY COOL CHOICE!～

～よりよい社会を考える子どもを育む社会科学習～



1 社会との関わりを意識した自分事の追究へ誘うための単元構成

新学習指導要領に「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力」を養うことが示されています。その実現のためには何が必要なのでしょうか。私は「社会との関わりを意識した自分事の追究」が必要だと思います。子どもが問題解決の見通しをもち、社会的事象の意味や特色、相互の関連を考えたり、社会への関わり方を選択判断したりする社会科学習が今求められています。このような社会科学習を通して、公民としての資質・能力の基礎を育成していくのです。

そこで、本実践では、単元前半は飲料水等供給事業の意味や特色を社会の状況と関連付けながら考察し、後半はこれまでの学んだことを活用し、子ども自らが地域社会の一員として社会への関わり方を選択判断する活動「MY COOL CHOICE」を組み込んだ単元(12時間)を下の表のように構成しました。

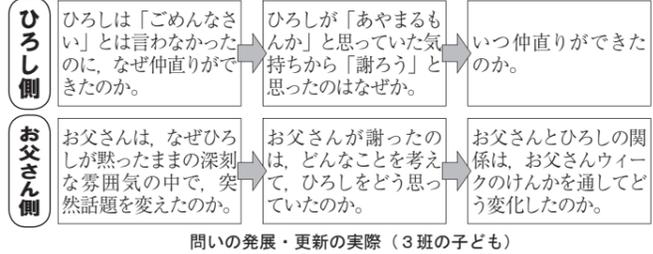
時	学習活動
1～2	熊本地震時のライフライン復旧について調べ、自ら課題を把握する。【問題解決へ見通しをもち、追究意欲を高める段階】
3～9	「飲料水等供給事業」を時間的・空間的な視点や相互関係に着目して考察する。【「社会的事象の意味や特色、相互の関連を考察する学習」(考察)】
10～11	附属小ライフライン未来会議を開き「MY COOL CHOICE」を構想する。【「社会に見られる課題を把握して解決に向けて選択判断する学習」(構想)】
12	これまでの学びを振り返る。(MY COOL CHOICE実践)

中で「もしもひろしとお父さんが、相手に言えなかった本音話を話したら」と仮定し、「お父さんウィーク四日目」の会話をエピソードとして書くという活動です。4人グループでひろし側、お父さん側の2ペアに分かれ、次のように学習を進めていきました。

時	学習活動
1	学習課題と学習計画表をもとに単元の見通しをもち、「カレーライス」を読んで「わたしの問い」を立てる。
2～6	「ひろし」と「お父さん」のそれぞれの立場から「わたしの問い」の解決に取り組み、「二編のエピローグ」を作る。
7	力試しの課題に取り組み、単元の学習を振り返る。

2 単元の見通しをもつことのできる学習課題の設定と単元構成

第2次では、ひろしとお父さんのそれぞれの立場で「わたしの問い」を解決し、問いを発展・更新しながらエピソードを書いていきます。例えば、本学級の3班では、第4時までに次のように問いを更新してきました。



第5時、3班のひろし側のペアは、「仲直り」を中心にエピソードの文章を仕上げようとしていました。しかし、同じ班のお父さん側のはると君から、次のような考えが出されます。

はると: お父さんは「今度は別の料理も…」と言っているから仲直りしていると思っているけど、ひろしの立場だと「ごめんなさい」は言っていないから、まだまだもやもやしているんじゃない。

深い学びへ向かう子どもたち

導入では「熊本地震時のライフライン」を提示しました。すると、子どもたちは当時の経験をもとに「生活苦」について語りだしました。つまり、当たり前な生活が送れなかった事実を挙げていったのです。「今はどうなのか?」と問い返すと、当然「大丈夫。」「元通り。」と答える子どもたち。そこで、なぜ元通りの当たり前に戻ることでできたのか予想させながら、「わたしたちの熊本『ライフライン』～探ろう!ライフラインのひみつ!～」という主題を設定しました。子どもたちは「どんな秘密があるのか?」「何を調べればよいのか?」「どのように調べればよいのか?」といった問いをもち、主体的に社会と関わっていかうと追究意欲を高めていました。



水源地を見学する様子

2 対話を通して、多面的・多角的な捉えに向かう

第8時までに、熊本市の飲料水等供給事業を社会的事象の見方・考え方を働かせながら考察してきた子どもたち。特に、時期や時間の経過に着目し、過去と今を比較したり変化を明らかにしたりしながら考察していきました。その過程において、供給の仕組みやそれに携わる人々の工夫や努力等について理解していきました。そして、いよいよ未来について考察していきます。未来社会につながる問い「これからも今の生活が続けられるのだろうか」を取り上げて課題とし、みんなで追究していきました。これは、子どもの将来に関わる切実な問いです。これまで調べた事実や生活経験等を基に自分の考えを創り出していきました。

第9時は、課題について話し合うことを通して、自分たちの暮らしを支えるライフラインを「限りある資源」「自分たちが生きる未来社会」と関連付けて捉える時間です。子どもたちは、次のように語り始めました。

この考えを全体で取り上げると、結びの一文に着目している子どもが次のように発言をつないでいきました。

まさき: ひろしの立場から見ても仲直りしていると思っていた、最後の行に「ぴりっとからくて、でもほんのりあまかった。」とあるんですけど、「ぴりっと」は中辛だけど、「ほんのりあまかった」は仲直りの気持ちが入っているんじゃないかなと思いました。ともか: 私たちはカレーの味を中心に書くんだけど、カレーの甘いというのは子どもっぽい考え、最初の絶対謝らないと意地を張る部分。ぴりっと辛いというのは大人の部分と考えたんです。



言語活動を再考する

その後、結びの一文について各班で検討する場を設定すると、カレーの味についての描写と、ひろしとお父さんの相互関係や心情の変化を関連付けて捉え直し、エピソードを再考する姿が見られました。「仲直り」を中心に話し合っていた3班も、ひろしとお父さんの関係がただ元に戻ったのではなく、2人の関係がより深まっていることを捉えることができました。

結びの一文は、そのまま読めば単なるカレーの味です。しかし、対話を通してその描写がどんな働きをしているかに着目していくことで、ひろしとお父さんの関係を捉え直していく姿が生まれました。さらに、自分の言語活動を再考することで、一人一人が言葉による見方・考え方を働かせて、人物の相互関係や心情の変化について考えを広げ深めることができました。

3 成果と課題

2つの立場から相互関係や心情を捉える「二編のエピローグ」という言語活動を設定し、それぞれの立場から「わたしの問い」の解決に取り組んでいったことで、ひろしとお父さんの視点を行き来しながら、二人の揺れ動く心情について考えを広げ深めていく姿が見られました。今後はさらに、一人一人が働かせた「見方・考え方」の自覚を促したり、共有したりするための手立てを明らかにしていきたいと考えています。

こう: 今地球にある資源は限りがあるから、続けるのは難しいと思う。けん: 僕は、新しいエネルギーが見つければ続けられると思う。あき: でも、すぐなくなるかもしれないでしょ。私は、昔に比べて使っていることが問題だと思うけど…。

あい: 私は昔には戻ってほしくない。今の生活を続けたい。あき: だから、一部の人のだけじゃなくて、みんなで節水や節電とかに取り組まないといけないと思う。

対話の中で、「限りある資源」「自分たちが生きる未来社会」と関連付けて思考する姿が見られました。また、昔の暮らしと今の自分たちの暮らしを比較するなど、社会的事象の見方・考え方を働かせながら考察することができました。そして、社会に見られる課題を整理し、自分たちにできること(MY COOL CHOICE)を考え始めました。

根拠を示しながら話し合う

3 成果と課題

単元の導入で問いをもたせることにより、問題解決の見通しをもち、自分事の追究を進めることができました。また、未来社会につながる問いを追究することで、子どもの思考の中で考察と構想をつなげることができました。そして、考察したことを基に社会に見られる課題を整理し、地域社会の一員として社会への関わり方を選択・判断して、構想シートにまとめることができました。

今後は、さらに実践を積み重ね、よりよい社会の実現に向けて、社会の在り方や働きかけを粘り強く考える子どもを育てていきたいです。



子どもがまとめた構想シート